



## 6月の言葉

### 『骨格予算』

次期町長選挙に不出馬表明をした執行権者が来年度の予算を当初予算案として上程する事はない。そこで、義務的経費や継続的事業程度を編成した予算。



## 6月のお薦め



黒沢明監督映画の作歴は、ベートーベンの作歴とよく似ています。『姿三四郎』が交響曲第1番。『生きる』が第五番（運命）。『七人の侍』が第6番（田園）。『影武者』が第9番（合唱つき）。『生きる』は、42歳の時の作品。『七人の侍』は、その翌年です。こんな事からも巨匠を垣間見る事例です。また、黒沢明監督映画は、人が死ぬ恐怖は伝えますが、瞬間を見せません。昨今のテレビなど演出効果に疑問を感じます。



### 黒澤 明監督作品

# 生きる

黒沢明監督映画の『生きる』は、昭和27年の作品です。終戦から7年が経過し、いわゆる段階の世代が成長していき、高度成長経済が息吹き始めた時代の作品です。

住民参加の地域活動と、住民協働の町づくりを、公園づくりを通して感じます。今、叫ばれている「住民自治」に思いが繋がって行く作品だと思います。

住民が望むサービスを提供するため、住民の意見を取り入れ、反映されるように努力し、住民自身が町づくりに参加し、参画意識を高める事が、町の活性化の為に無くてはならない事だと感じ取りました。

無気力・無感動な人生を送ってきた公務員が「生きる」事に目覚め、「やるべき仕事」を見つけ、本当に「生きる」為に生まれ替わった！

作風は、『羅生門』に似ています。全体を流した後、個々の証言により物語の断片を小出しする方法です。

最後まで観なければ全体が理解できません。

ナレーションが絶妙です。冒頭のレントゲン写真を写してのナレーション、そして主人公が映しだされ「・・・今、彼は、生きていたとはいえないからだ。」と言う強烈さです。

しかし、この映画の最後には、ナレーションが有りません。何処に出てくるのか？

「彼らは無名のまま、風のように去った。しかし、彼らの優しい心と勇ましい行為は、いまなお美しく語り伝えられている。彼らこそ侍だ！」『七人の侍』のラストシーンであります。

